日本医史学雑誌第三十七巻第一号
平成三年一月三十日　発行　　平成二年十二月一日受付

富士川游と雑誌

富士川　英郎

明治二十年秋、広島から上京した富士川游はただちに中外医事新報社に入社して、その雑誌の編集に携った。彼の医学ジャーナリストとしての活躍がここにはじまったのであるが、『中外医事新報』は明治十三年一月に、当時、東京市神田区東松下町で開業していた原田貞吉が創刊した雑誌である。

これより先き、明治十年に太田雄寧が創刊した『東京医事新誌』があって、これが我邦における近代的な意味での最初の医学雑誌であったが、太田が嘗て米国に留学した関係から、これは英米医学の系統を引いた雑誌であった。ついで翌明治十一年には田代基徳の主幹する『医事新聞』が出たが、これは臨床紀聞を主とするものであった。これに対して当時の我邦で勃興の気運にあったドイツ系医学を背景として、明治十三年一月に原田貞吉が創刊したのが『中外医事新報』であったが、原田は最初この雑誌を、嘗て緒方惟準の適塾で同窓だった高木友枝や湯目補隆とともに編集していた。しかし、やがて湯目は退社し、高木も明治十八年に福井県病院長となって赴任したので、その後は原田がひとりでこの雑誌を経営、編集していたのであった。

ところで、富士川游が広島から上京して、中外医事新報社に入社したのは、前述の通り、明治二十年秋のことであったが、これより先き、富士川は郷里の広島医学校在学中に、「医語ヲ一定スルノ議」という論文を草して、これを『中外医

事新報』第九十五号（明治十七年三月十日）に投稿したり、翌明治十八年三月の同誌に「生卵に対する特異素因」を掲載したのをきっかけとして眞野文という人と数回にわたって論争したりした。いずれにしても、当時、広島にいた富士川と東京の『中外医事新報』との間につながりができたことは確かであって、やがて彼は明治二十年秋に上京するとただちに中外医事新報社に入って、その社員となったが、これはたぶん富士川の才能を認めた原田貞吉の招きによったことであったのだろう。

翌明治二十一年から『中外医事新報』はその形を大きくして、内容も著しく改良され、発行部数も二千部を超えるようになったが、富士川はその編集主任として、この雑誌を主宰した。また、富士川が医史学の研究を本格的にやりはじめたのは明治二十三、四年からのことであるが、その頃から富士川は『中外医事新報』に「史談」欄を設けて、さまざまの医人伝などを連載した。呉秀三の医史学に関する論考もまたこの欄に掲載されたものが多い。

大正六年七月に至って、原田貞吉が隠退して、その経営していた中外医事新報社は、富士川游、藤井秀旭、竹内薫兵、小田平義の四人が代って経営するところとなったが、やがて昭和二年十一月に富士川の主唱によって日本医史学会が創立されると、『中外医事新報』は翌昭和三年一月からその機関誌として、当時の我邦における唯一の医史学専門の雑誌となったのである。だが、その誌名は依然として『中外医事新報』と称しつづけたが、これは富士川がこの誌名、もしくはこの雑誌の過去の歴史とのつながりを断ち切ることができなかったせいだろう。富士川は昭和十五年十一月六日に没し、『中外医事新報』は翌昭和十六年一月から『日本医史学雑誌』と改称されて、その内容に適応した表題を持ったが、その後、太平洋戦争が熾烈化する情勢のうちで、昭和十九年十二月号を最後として、廃刊されたのであった。『日本医史学雑誌』が戦後に復刊されたのは昭和二十九年三月のことであって、それ以後、この雑誌はこんにちに至るまで連綿として発行されているのである。

明治二十年秋に上京した富士川がただちに中外医事新報社に入って、雑誌の編集に従事したことは前に述べた通りであ

るが、彼はその傍ら明治二十二年に別に二種の医学雑誌を創刊して、これを主宰した。その第一は同年二月に創刊された『普通衛生雑誌』である。これは彼が松田堅道とふたりで編集した雑誌で、松田堅道は備前の人であるが、富士川は彼とおそらく中外医事新報社において識りあったのだろう。『普通衛生雑誌』の創刊号には、「新刊ニ就テ謹デ読者諸君ニ告グ」という文章が掲げられており、そのうちに

「ソモ々々、三千年來桃源ノ一小天地ニ潜ミタル吾人同胞カ一タビ白哲人種ノタメニ睡夢ヲ攪破セラレ次テ其鼓勵ヲ受ケテヨリ、競フテ其擧動、衣服、語言、機器等ヲ習ヒ、上ハ制度ヨリ下ハ風俗ニ至ルマデ、悉ク皆西洋ニ是レ則ル。此ニ因テ、學藝ノ進歩復タ前日ノ比ニアラズ。一般ノ人民モ亦聰明才能ヲ加ヘ、從テ衞生ノ思想較発達シ人々生命ノ價値ヲ知リ、病ヲ避ケ身ヲ養フニ志スノ傾向アリ。之レ大ニ国家ノタメニ慶賀スヘキ¬ナリ。但惜ムラクハ一般公衆ヲシテ衞生ノ方術ヲ曉ラシムルノ機関ニ乏シク、爲ニ衞生ノ思想ヲ涵養発達スルニ苦シムノ嘆ナキニアラズ。我儕之ヲ憾ム¬久シ。今ヤ、時到リ機熟シタルヲ以テ玆ニ普通衞生雑誌ヲ刊行シ、可成的平易ノ文章ヲ用ヒ衞生ノ學理ト實驗トニ関スル¬ヲ一般公衆ノ耳目ニ達セシメントス」

という一節があって、この雑誌発行の趣旨を明らかにしている。この『普通衞生雑誌』は、前述の通り、明治二十二年二月に創刊されたのであるが、おそらく翌二十三年十二月号を以て廃刊されたものと思われる。

富士川が明治二十二年に創刊した第二の雑誌は『私立奨進医会雑誌』である。この雑誌は明治二十二年四月に第一号を出し、同二十四年十二月号を以て廃刊されたようであるが、私立奨進医会はじめ富士川游の父雪が広島県安佐郡安村において開業する傍ら、明治九年七月に近隣の同業者たちを糾合して組織した会であった。これは会員たちが定期的に集って、東京で出ていた数種の医学雑誌を読みあいながら互に医学的知識の増進を計るのを目的とした会であったが、游は上京するとともにこの会を東京に移し、やがてその機関誌として『私立奨進医会雑誌』を発行したのである。東京に移された私立奨進医会ははじめその会員の数も少く、藤根常吉、松田堅道、鼓四郎など、富士川が中外医事新報社で識りあった

人々に限られていたが、やがて呉秀三、土肥慶蔵、井上通泰、高田畊安などがこれに加わり、この会は次第にその規模を拡大して、その基礎を固めていったのであった。

『私立奨進医会雑誌』が廃刊されたのち、富士川は明治二十六年五月に、同会の新しい機関誌として『医談』を創刊した。明治二十六年五月十九日にその第一回編集会議があって、呉秀三、村上庄太、水野悦造、高比良養次郎、藤根常吉、富士川游の六名が集ったが、『医談』はその記事を医道、医説、医方、医範、医話、医議、医事等の項目に分って掲載し、「医ノ風紀ヲ保持センコト」をその主な目的とする奨進医会の主義に適した論説を多く載せたのであった。しかし、号を重ねるに従って、次第に医学史に関する講演筆記や論文の類が多く載せられるようになり、例えば長與専斎「大村藩種痘の話」や大澤謙二「我邦ニ於ケル生理学発達ノ梗概」、田口和美「徳川氏の末世に於ける解剖に就て」、和田英松「疱瘡の流行と皇室」などは、そのうちの注目すべきものであった。また、富士川自身も、「先哲相傳」「蘭東事始」「麻酔法発明史略」「古印度の医学」「日本ノ医事ニ干渉セル西洋医家ノ事跡ヲ記ス」「本朝古医書考」「我邦に於ける西洋医学の起原に就て」「医史学ノ梗概」「後藤艮山」などをこの雑誌に掲載している。

この『医談』は明治四十一年十一月に第百十四、五合併号を出して廃刊されたが、その後継誌として翌四十二年八月から『刀圭新報』が装を新たにして、同じく奨進医会を母胎として刊行された。古川明氏の示教によれば、『刀圭新報』の表紙絵はダニエル・ル・クレルクの『医学史』(Daniel le Clerc: Histoire de la médicine, 1696) の扉絵からとったもので、中央に医神アスクレピオスの像が画かれているが、この絵を『刀圭新報』の表紙に選んだのは富士川か、或は岡崎桂一郎であったかもしれない。『日本米食史』の著者岡崎桂一郎は早くから富士川と識りあい、明治二十八年頃から奨進医会の幹事のうちに名をつらねていたが、『刀圭新報』が創刊されたとき、その主幹となって、編集委員たる富士川游、福井信敏、尼子四郎、藤根常吉とともに、この雑誌の編集を司ったのであった。

『刀圭新報』には医人道義、医家経済、社会医学、医事法制、医師の権利義務等の問題に関する諸家の論説が多く載せ

られたが、富士川の執筆したものには、「医人ノ地位及ビ社会的関係」「医師地位問題ノ一、二」「医師ノ報酬」「医術過誤」「医業ト無報酬」「貧病者ノ施療ノ義務」「臨牀医学ト公衆」などがある。また、この雑誌の明治四十三年一月号からは毎号その巻頭に奨進医会によって制定された「医箴」十五則が一則ずつ、その例証とともに掲げられたり、フーフェラントの『医戒』のドイツ語の原文がその杉田成卿による訳文とともに連載されたりしている。

だが、一方で、この『刀圭新報』にも医学史に関する論考や資料などが数多く掲載されたことは言うまでもなく、富士川は「医心方」「蘭学創始」「其角句中の医学」「奈須柳村先生」「洋医小史」などをはじめとして多くの医人伝を執筆したが、岡崎桂一郎の「元祿、享保頃ノ加賀藩ノ儒医」や「儒医ノ藝苑叢話」なども注目すべきものであった。因みにこの『刀圭新報』は大正八年十一月号を以て廃刊されたようである。

ところで、話は少し前にもどるが、明治二十九年五月に富士川は呉秀三、尼子四郎、三宅良一とともに藝備医学会を組織して、同年六月にその機関誌『藝備医事』を創刊した。この藝備医学会は、広島県の医事を促進し、「医家たるものの人物を養成すること」を主な目的とした学会で、その趣旨は富士川がのちに語った次のような言葉のうちに明らかである。

「明治二十九年頃には東京医学会、成医会、国政医学会を始めとして既に多くの医学会が創設せられて居りました。しかしながら、それはすべて医学の進歩を謀ることが目的でありました。我が藝備医学会は固よりさういふ意味の学会でなく、むしろ、それに対立して医家たるものの人物を養成しようとすることを期図したのであります。医科大学もある、各高等学校に医学部もありまして、医家の修めなければならぬ学術は十分に教授せられて居りましても、それは要するに医家たるの資格を得るに必要な科目を修むることだけに止まって、実際に病めるものを対象として、真に医家たるべき人の魂を育てるといふやうな涵養の方法は考へて居られないのでありますから、この欠陥を補ふために是非とも新たに学会を興すことが必要であると考へた私は第一にそのことを主張したのでありました。一同もそれには賛成でありまして、それを藝備医学会の特殊な目的とすることに衆議一決しました。それにつきて実際に取るべ

き方法は種々あるべき筈でありますが、私は先賢古哲の業緒をつぎて更にそれを恢弘することをつとめるのが、我々が自からその心を綺麗にし、良き医家として世に立つことを期図するために捷径の方法であると考へました。同じ道に進むのでありますから、前なるは後を導き、後なるは前なるに引かれて相共にその道を歩むべきであります。そこで既に医家となった人も、これから医家となるべき学生の人々も共に団結して相倚り相扶けて前賢古哲の後を追ふて、切磋琢磨することが第一緊要であるといふことを説いて、毎会この趣旨は強調せられ、機関雑誌の記事にはこの特殊なる目的を達するために種々の方面からの材料が載せられたのであります」

明治二十九年六月に創刊された『藝備医事』には、実験医学に関する諸家の論説も掲載されはしたけれども、この雑誌の主な特色は、富士川や呉秀三の執筆した藝備出身の医人伝が数多く載っていることである。この雑誌は富士川の没後、昭和十七年十二月に第五百五十五号を最後として廃刊された。

富士川は明治三十一年四月に東京を立って、渡欧の途にのぼり、約二年半にわたってドイツに留学していたが、同三十三年九月に帰国すると、三十五年四月に『治療新報』を創刊した。『治療新報』は日本及び外国の医事新聞や雑誌の類に載せられたさまざまの治療に関する論説や実験の記事を摘録するとともに、当時の斬新な治療を紹介し、報道することを目的とした雑誌であった。富士川はこの『治療新報』の創刊号に先ず「治療法の略史」を載せ、ついで第二号以下に「虎列刺の療法」「震揺按摩法」「臓器療法」「筋僂麻質斯の療法」「吸入療法」等々を載せたが、治療法の研究は富士川がイェーナ大学で、マッテース教授の指導のもとに従事したものであった。なお、『治療新報』は大正十五年まで刊行されていて、昭和になってからは廃刊されたようである。

富士川がそのドイツ留学中に新しく興味をもったものに、「児童学」があった。そして彼は帰国後、明治三十五年十二月に高島平三郎、松本孝次郎、塚原政次らとともに日本児童研究会を創立して、高島らが既に同三十一年から刊行していた『児童研究』をその機関誌とした。日本児童研究会はのちに日本児童学会と改称されたが、富士川は明治四十年からこ

の会の幹事となって、主として児童の精神及び身体の状態を医学的な見地から研究することに従事した。そしてその機関誌『児童研究』の編集も富士川がはじめは高島平三郎とともに、晩年にはひとりでこれを主宰したのである。『児童研究』は富士川の没後、昭和十六年中に廃刊されたものと思われる。

さて、以上の雑誌はいずれも医学と関係のあるものであったが、富士川はこれ以外に、医学と直接の関係のない雑誌も数種、創刊して、主宰した。その第一は明治三十八年四月に創刊された『人性』である。

『人性』は生物学、人類学、心理学、医学、社会衛生学、法律学、文化史等を基礎として、人間の身体及び精神の構造と機能を研究し、このような立場から人間の社会的・精神的な生活を解明しようとする目的をもった雑誌であったが、富士川はその創刊号の巻頭に「人性」というこの雑誌の発行の趣旨を述べ、人性研究の要綱を紹介した文章を掲げたほか、「信仰ノ説」「不死論」「鼻ノ觀相ニ就キテ」「頭蓋ト賢愚」「新井白石先生ノ頭骨」「偉人ノ体格」「家族病の遺傳」「神靈説ニ就キテ」「性慾学ノ現狀」「一元論的宗教」「理論的一元論」「一元論」などを執筆して、これを逐次、この雑誌に発表した。

また、富士川の知友のうちでは、片山国嘉、呉秀三、三浦謹之助、下田次郎、花井卓蔵、高島平三郎、石川貞吉、三宅鉱一、永井潜、三上義夫、石橋臥波、荘司秋次郎などが、しばしばこの雑誌に寄稿しているが、この雑誌『人性』はその創刊当時、一般の読書界においてかなりの反響を呼んだと言ってもよい。『学鐙』『神經学雑誌』『東京經済雑誌』その他にその書評が載ったが、内田魯庵が主宰した丸善の『学鐙』に載った書評は次のようなものであった。

「政治宗教文藝哲学等苟くも人に由りて研究さるる者ならば先づ研究者たる『人』夫れ自身を研究せざるべからず。然るに従来総ての科学と哲学とは久しく相乖離したる中に殊に『人』に関する研究は心理学及び生理学を中心としたる哲学者及び医学者各々一方に介在して少しも相交渉せず。他の宗教家法律家の如きは『人』の研究の如きは全然医家の任として顧みる処なし。此故に単一なる思想の研究にのみ従ふものは勢ひ自己の独断を旨とし所謂様に依て胡盧

を画くの愚を繰返して少しも怪まず。科学者は日に益々研究の微に入って而して愈々本源より遠ざかりて他の思想上の問題の如きは全然空想視するを常とす。近来此の如く彼此相乖離する弊竇は漸く学者の認むる処となりて科学者哲学者の手を携へて共に先づ『人』を研究するに非ざらば到底彼岸に達し難きを知りて『人』其物の研究は有らゆる宇宙の問題の中心となりたり。是れ実に医学の問題にあらず、哲学の問題に非ず、有らゆる人類の共有問題なり。雑誌『人性』は惟ふに亦此目的を以て生れたるもの乎。阿世俟俗是れ専らとし只売らん事をのみ欲する紛々たる群雑誌中に在りて嶄然一頭地を抜ける謹厳真摯なる研究的態度を以て生れたる此『人性』の如き我が雑誌界をして重からしむるに足るもの、我等は編輯者ドクトル富士川游氏に対って深く其業を謝すると共に、爰に将来の成功を期して以て其蘊けとなす」

雑誌『人性』はのちに大正六年、その第十三巻第一号より富士川游、永井潛、藤浪剛一の三人の主幹となったが、翌大正七年には廃刊されたようである。

富士川の郷里広島県は昔から浄土真宗の盛んな土地で、彼も亦、若いときからその信者となっていたが、彼が公に宗教活動をやりはじめたのは、大正四年九月、『中央公論』に「親鸞上人」を発表したのをきっかけとして、翌五年一月に、高楠順次郎や藤岡勝二とともに、親鸞上人讃仰会を創立してからのことである。親鸞上人讃仰会はのちに正信協会と改称されたが、大正七年二月からその機関誌として『法爾』を発行した。そして富士川はその第一号から第十四号に至るまで、「親鸞上人」を連載し、ついで第十六号から第三十二号に至るまで、「真実の宗教」を連載したが、彼以外の人たちでは、島地大等、妻木直良、羽溪了諦、金子大榮、梅原眞隆、柏原祐義、鷲尾教導、是山惠覚、泉道雄といったような、真宗関係の当時の著名な仏教学者たちがほとんど総動員されて、この雑誌に毎号のように寄稿している。また、片山国嘉、高島平三郎、永井潛、暉峻義等といったような医学者たちの所感もしばしばこれに載せられたが、富士川の晩年には『法爾』はほとんど彼の個人雑誌のようなものとなっていた。そして富士川の没後もこの雑誌は正信協会の幹部の人々によっ

て刊行されつづけ、赤松金芳氏の示教によれば、昭和十九年五月発行の第三百十一号を以て廃刊されたという。

富士川がその編集を主宰した最後の雑誌は『飽薇』である。これより先き、在京の広島県人の間に「同好社」という一種の社交団体があって、ときおり集会などを催していたが、大正十四年一月にその会の規模を拡張して、「飽薇同好社」と称することになり、同時に雑誌『飽薇』を刊行することが決議されて、その編集を富士川が一任された。飽薇というのは富士川の命名によるもので富士川はその意味を次のように語っている。

「安藝の国名は始めて日本書紀に見ゆ。素盞嗚尊安藝国可愛之川に到る云々の文あり、舊事紀に阿岐に作る。共に仮字にて名義は攷ふべからず、或はいふ、神功皇后征韓の時此国に到り給ひ、四方の貢物、飽き足り、因て飽国と名づけらるると。此説正史に見えず、但しアキといへるは土産飽き足るの意なるべしといはる。古書に飽国、秋津国、安藝、阿岐、阿藝などの文字を雑へ用ふ。後定めて安藝の字を用ふ。字は異なれども義は同じ。

備後はもと備前及び備中と併せて吉備と名づけらる。その吉備と名づける義考ふべからず、これを分ちて前中後の三とせるは何れの世なりしか詳ならず、吉備の字古の書に或は岐備、黄薇、貴備、寸簸などに作る。

今、飽薇の二字を藉て安藝備後の国名を標し、これを以て結社の名に冠し、又これを雑誌の題号とす。敢て奇を好むにあらず、これを古訓に徴して、その称呼を簡易とせるのみ」

雑誌『飽薇』には諸家の広島県に関する論説や史話や随筆が多く載せられたが、富士川はその創刊号に「菅茶山先生の医説」と「森枳園先生」を執筆したほか、つづいて「安藝門徒」「土生玄碩先生の頭骨」「多賀庵風律翁」「野村雨荘先生」「西洋聞見録」「生活と迷信」等を執筆した。また、他の人々では、花井卓蔵、横山雅男、小鷹狩元凱、呉秀三、高島平三郎、眞田鶴松、下田次郎、浜野知三郎、尼子四郎等が時おり寄稿している。

『飽薇』は富士川の没後、昭和十五年十二月号を最後として、廃刊された。

嘗て常光浩然氏は、「富士川先生は会が非常にお好きであった。先生に若し道楽といふ名をつけるものを探したら、そ

れは同志と倶に会を作り、会を維持して行くことであったとも見られる」と言ったが、確かに同志を語らって、学会を組織し、雑誌を刊行することは、富士川の趣味や嗜好以上のものであったと言ってもよく、それは中外医事新報社に入社した当時から晩年に至るまで、彼の生涯を一貫して熱心に行われたことであったのである。

（神奈川県鎌倉市）

Fujikawa Yū und Zeitschrift

von Hideo FUJIKAWA

Im Laufe seines Lebens begründete Fujikawa Yū（富士川游）manche wissenschaftliche und medizinische Gesellschaften und gab ihre Zeitschriften heraus. Seit 1887 leitete und redigierte er ≪Chūgai Ijishinpō≫（中外医事新報）und ≪Futsū Eisei Zasshi≫（普通衛生雑誌）. Im Jahre 1898 ging er nach Deutschland und studierte an der Universität zu Jena innere Medizin. Nach Japan zurückgekehrt, gab er 1902 die Zeitschrift ≪Chiryō Shinpō≫（治療新報）und 1905 die anthropologische Zeitschrift ≪Jinsei≫（人性）heraus, ferner redigierte er seit 1918 die religiöse Zeitschrift ≪Hōni≫（法爾）.